

保育者養成における保育技術向上のための一提案(1) ～保育現場で必要とされる弾き歌いの技術修得を目指して～

中武 亮子 ・ 片野 郁子 ・ 後藤 祐子

A Proposal for Enhancing the Childcare Skills
of Students in Childcare Training Programs:
Improving the Ability to Accompany Oneself
While Singing as a Childcare Professional

Ryoko NAKATAKE, Ikuko KATANO, Yuko GOTO

I はじめに

中武、片野、後藤は、宮崎学園短期大学の保育科および初等教育科において、手遊びや童謡等、幼児の音楽遊びの表現指導を共通科目である「あそびと音楽Ⅰ・Ⅱ」及び「音楽」の中で行っている。その中の重要な技術として、ピアノの演奏技術の習得がある。ピアノは楽譜通りに弾くことはもちろん、コードを使って、曲を表現するのに適した伴奏の形にアレンジすること、肘や拳で自由に打つ打楽器的な使い方など、保育の場面や子どもたちの状況によって様々な表現が可能な楽器であることから、ピアノによるこれらの演奏技術を習得することは保育の中で子どもとコミュニケーションを図るための重要な技術であると思われる。そのピアノの技術習得のために、本学では、保育科において「器楽」、初等教育科において「音楽」の科目の中で個人レッスンを行ってきた。

これまでのピアノの指導において、単にピアノを演奏するという意味においての技術は、本学入学後にレッスンを開始した初心者であっても、卒業までにはバイエル教則本の80番以降の曲の演奏や子どもの歌の伴奏ができるようになる等、一定の成果を得ている。しかし、弾き歌いにおいては、弾きながら歌い、子どもの様子を見ながら声をかけたり歌詞の先読みをしたりするなどの、保育現場で要求される技能に達しない学生も多いという現状がある。

II 研究の目的

本学のディプロマポリシー (Diploma Policy : 学位授与の方針、以下DPと記載) は、そのVにおいて「大学で学ぶ専門的知識や技能を実際場面に活用できる。(実践力)」ことを項目として掲げている。この内容に対応して、保育科DPの第1項においては、「①保育者としての社会的使命と責任を自覚し、専門的な知識・技術の習得に努め、常に自己の資質向上に努めることができる。(知識・技能・向上心)」ことを項目として掲げている。

本研究はこのDPを基盤として、「幼児の歌唱、その他の音楽活動を行う際、コードネームを見ながら弾き歌いできる技能を身に付け、保育の場面で生かすことが出来る学生を育成するための指導について検討すること」を目標に行っている。

本稿においては、これまでの本学のピアノレッスンについて考察すると共にレッスン形態の改編についての検証を行う。また、他の保育音楽関連科目との連携におけるピアノ技術向上への可能性を検討し、今後期待される成果について考察したいと考える。
対象は本学保育科及び初等教育科1、2年の学生である。

Ⅲ 保育現場で期待されるピアノ技術

1. 保育現場におけるピアノ技術

保育の現場において保育者は、歌唱その他の音楽活動の際、ピアノ等の鍵盤楽器を弾きながら子どもの状況を観察し、必要な声かけをしながら自らも大きな声で歌っている。また、毎月行われるお誕生日会をはじめとする園の各種行事においてもピアノは必ずと言っても良いほど使用されることから、ピアノ技術は保育者に必須の技能であると考え。よって、ピアノ技術の向上を目指すことは、保育現場への就職を希望する学生にとっては就職活動の一環であるとも考えられる。

2. 学生の保育現場への受験に見る「弾き歌い」の現状

本学に寄せられた、保育園、幼稚園の求人票のほとんどすべてに「弾き歌い」の課題が記されていることから、保育現場における「弾き歌い」の必要性がうかがえる。

資料1は、平成22年度から平成24年度の幼稚園教諭、保育士採用試験受験後に学生が書いた報告書から、ピアノ実技試験の課題として出されたもの一部である。

【資料1】

Y幼稚園	「まつぼっくり」の初見弾き歌い 自由曲 注1)
T幼稚園	当日指定した3曲の中から1曲、初見で弾き歌い 自由曲 (バイエル終了程度)
H保育園	童謡の初見弾き歌い 任意のバイエル
H幼稚園	自由曲1曲
I幼稚園	当日指定した課題曲を弾き歌い
P幼稚園	自由曲のみ
H i 幼稚園	「さよならのうた」弾く 自由曲
E保育園	初見曲弾き歌い 自由曲
東京の幼稚園	あらかじめ指定した課題曲を弾き歌い 自由曲

注1)「自由曲」とは、受験者が任意に曲を選んで演奏すること意味する

数例取り上げた中でも弾き歌いの課題が大きな割合を占めており、近年、弾き歌いを課題とする園が増加の傾向にあり、保育現場においてピアノの演奏技能に加えて、即戦力となる弾き

歌いの技術が要求されていることがうかがえる。

これらのことから、保育の現場において音楽がなくてはならないものであるという事は言うまでもないが、そこで求められているピアノの技術は、保育活動を円滑に実施するための伴奏や効果音など、音を自由に使える技術ではないかと推察する。

IV 本学の音楽教育の現状

1. 本学保育科における音楽関連科目

(1) 保育科

- ① 1 年次 器楽Ⅰ（ピアノレッスン／通年 2 単位） 保育内容の研究表現（半期 1 単位）
あそびと音楽Ⅰ（半期 1 単位） あそびと音楽Ⅱ（半期 1 単位）
- ② 2 年次 器楽Ⅱ（通年 2 単位） 保育指導法Ⅲ（半期 1 単位）
身体表現及び即興演奏法（半期 1 単位） 器楽活用法（半期 1 単位）

(2) 初等教育科

- ① 1 年次 音楽Ⅰ（ピアノレッスン／通年 2 単位） 保育内容の研究 表現（通年 2 単位）
指導法研究 音楽（通年 2 単位）
レクリエーションインストラクター実技（半期 1 単位）
- ② 2 年次 音楽Ⅱ（通年 2 単位） 表現指導法（半期 1 単位）

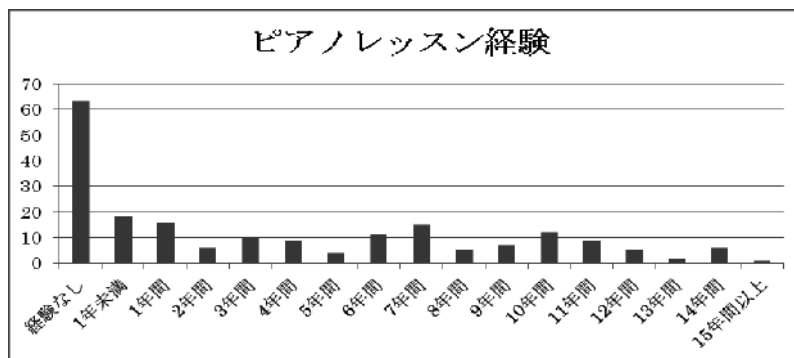
2. 鍵盤楽器経験についての学生アンケートから

資料 2 は、平成 2 4 年度に入学した保育科学生のピアノ経験について調査した結果である。この結果から、ピアノのレッスン経験が全くない、または 1 年未満の学生数を合わせた、いわゆる初心者が全学生の約 4 0 % を占め、非常に多いことがわかる。これらの学生にとってはピアノを弾くだけでも精一杯であり、歌いながら弾くという作業は至難の技であると思われる。

そのため、難しい伴奏の形をそのまま楽譜通りに再現するのではなく、コードネームを習得することによって自分の弾きやすい伴奏形に変えて、余裕をもって保育活動に当たることができれば、より充実した活動が展開できるであろうと考える。また、音楽歴が長くピアノの演奏を得意とする学生にとっても、コードを習得することによってより豊かな音楽表現ができる可能性が広がり、さらに楽曲理解が深まると考えられる。

[平成 2 4 年度入学 保育科 回答者 199 名]

[資料 2]



3. これまでのピアノレッスン形態

昨年度までのピアノレッスンでは、1名の教員が90分の授業時間内に、6名程度の学生に対して一人平均15分の個人レッスンを行っていた。様々な進度の学生に対して一人ひとりの進度に合った指導ができるという意味においては大変有効な形態であると言える。しかし、「バイエル教則本」、「子どもの歌の曲集（伴奏）」、「コードによる伴奏」、「弾き歌い」のすべてを実施するには15分というレッスン時間は短く、練習の不足しがちな学生にとっては大幅な技術向上を期待できない場合もあった。

このように以前は、歌を歌うときに必要な伴奏の技術はピアノの個人レッスンで指導してきたものの、保育の現場で活動を行う中で、場面に応じた伴奏を付けて弾く即興演奏方法や、簡単な編曲をする技術についての指導は多人数での授業の中で行われている部分が多く、学生の経験は不足しているのが現状であったと思われる。また、幼少期から音楽の基礎的な学習を積み重ねてきた学生と、短大入学後に初めてこの分野に触れる学生の能力差は大きい。特にこれまでは、卒業時に「コードによる伴奏」及び「弾き歌い」にまで到達する学生の割合は低く、従来のピアノの授業だけでは保育者に求められる能力である「弾き歌い」の習得は難しいという状況があった。

V ピアノのレッスン形態改編への試み

1. レッスン形態改編の内容

学生のピアノ技術習得における課題の克服に向けて平成24年度は、中武、片野、後藤が共同してピアノのレッスン形態（資料3～6）に、に示す通りの改編を提案し、「器楽」及び「音楽」の担当教員が実践を行った。

その結果、当初、学生達、とりわけ前年度には「ピアノ演奏のみ行うのが『器楽』及び『音楽』の実技試験であった」2年次の学生からは多くの不満の声や抵抗があった。また、1年生は概ね、「弾き歌い」や「グループレッスン」を当然のこととして受け入れて授業に臨んでいたが、前述の通り、初めてピアノのレッスンを経験する学生が多かったことから、授業担当教員にとっても、多くの戸惑いを抱えた状況が数ヶ月続いた。しかし、その熱心な指導のおかげで、前期の実技試験において、程度の差こそあれ、学生全員が歌いながらピアノを弾くことを実現させた。

〔平成24年度 保育科「器楽Ⅰ・Ⅱ」についての確認事項〕【資料3-①】

1. 授業目標

幼稚園・保育所等における音楽活動の指導者として必要とされるピアノ演奏の基本的技術習得を他の音楽教科と連携を取りながら学んでいくことを目指す。

具体的には、以下の通り。

- (1) バイエル教則本80番以降の曲を演奏する技能を身につける。
- (2) 保育所および幼稚園の採用試験で重視される、「子どものうた」の演奏及び弾き歌いの習熟を目指して指導を行う。

2. 実技試験実施要領（別紙、保育科「器楽」課題曲一覧参照）

(1) 器楽Ⅰ・Ⅱは通年の科目であるが、それぞれ前期、後期に実技試験を行い、必要に応じて追試験及び再試験を行う。(2) 器楽Ⅰについて

- ①課題曲一覧『必修曲』については、前・後期それぞれ全曲弾き歌いができるように練習し、当日指定された1曲を演奏する。
- ②課題曲一覧『選択曲』の中から、前・後期それぞれ3曲を選択、弾き歌いができるように練習し、当日指定された1曲を演奏する。
- ③前・後期とも、バイエル教則本の指定された範囲から、学生の技能に応じた任意の1曲を選んで演奏する。

(3) 器楽Ⅱについて

- ①課題曲一覧『選択曲』の中から、前・後期それぞれ5曲を選択、弾き歌いができるように練習し、当日1曲を演奏する。
- ②前・後期とも、バイエル教則本の指定された範囲から学生の技能に応じた任意の1曲を選んで演奏する。

3. その他

- ・学生個々の技能に応じて、伴奏の形を変えて演奏しても良い。
- ・レッスンにおいては、学生の能力に応じて、試験曲以外の楽曲を教材として用いても良い。
- ・課題曲として提示した曲は、その後の試験で選択曲として用いることはできない。
- ・一度、試験で演奏した選択曲及びバイエルの曲は、その後の試験で用いることはできない。
- ・実技試験の実施に当たっては、当該年度の学生便覧履修規定に従う。
- ・終了した曲も引き続き練習させ、保育に生かせるピアノ技術の定着を図る。

必修曲		選択曲		
		器楽Ⅰ・Ⅱ		
		前期	後期	
Ⅰ 前期	○夏季休業前に実施 ＜バイエル教則本＞ 任意の1曲No. 12以降	先生とおともだち ちゅーりっぷ おかたづけ めだかのがっこう おかあさん あめふりくまのこ たなばたさま	大きな栗の木の下で どんぐりころころ きくのはな やきいもグーチーパー まつぼっくり もみじ まっかな秋	
	○授業最終日に実施 ＜弾き歌い＞ ・おはようのうた・ちょうちょう ・おべんとう・こいのぼり ・とけいのうた	うみ はをみがきましょう 森のくまさん しゃぼんだま おばけなんてないさ アイスクリームのうた アイアイ とんでったバナナ 南の島のハメハメハ大王	とんぼのめがね 山の音楽家 雪のペンキやさん ジングルベル あわてんぼうのサンタクロース たきび おしょうがつ 豆まき ありがとう・さようなら	
Ⅰ 後期	○冬期休業前に実施 ＜バイエル教則本＞ 任意の1曲No. 35以降	アンパンマンのマーチ 春がきた にじ かたつむり パパはママがすき ぞうさん ふしぎなポケット バスごっこ ホ・ホ・ホ	いぬのおまわりさん 手のひらを太陽に 大きな古時計 ミッキーマウスマーチ おもちゃのチャチャチャ いちねんせいになったら さんぽ 世界中の子どもたちが はじめの一步	
	○授業最終日に実施 ＜弾き歌い＞ ・おかえりのうた・さよならのうた ・うれしいひなまつり ・思い出のアルバム			
Ⅱ 前期	＜弾き歌い＞ 選択曲から5曲 ＜バイエル＞ 任意の1曲→No. 60以降			
Ⅱ 後期	＜弾き歌い＞ 後期の選択曲から5曲 ＜バイエル＞ 任意の1曲→No. 70以降			
器楽Ⅰ 前期試験曲		1	2	3
器楽Ⅰ 後期試験曲		1	2	3
器楽Ⅱ 前期試験曲		1	2	3
		4	5	
器楽Ⅱ 後期試験曲		1	2	3
		4	5	

必修曲		選択曲		
Ⅰ 前期	○夏季休業前に実施 任意のバイエル曲	音楽Ⅰ		
	○授業最終日に実施 ＜弾き歌い＞ ・おはようのうた・ちょうちょう ・おべんとう・こいのぼり ・とけいのうた	前期	後期	
Ⅰ 後期	○冬季休業前に実施 任意のバイエル曲	ちゅーりっぷ ・おかたづけ めだかのがっこう ・おかあさん あめふりくまのこ ・たなばた にじ ・はをみがきましょう 森のくまさん ・かたつむり しゃぼんだま ・ぞうさん ありがとうさようなら ＜小学校共通教材＞ 春がきた 春の小川 さくらさくら 茶つみ うみ とんび	大きな栗の木の下で どんぐりころころ やきいもグーチーパー まつぼっくり もみじ ・まっかな秋 とんぼのめがね ・山の音楽家 ジングルベル あわてんぼうのサンタクロース たきび ・お正月 ・豆まき ＜小学校共通教材＞ ゆうやけこやけ ・うさぎ ふるさと ・虫の声 まきばの朝 ・スキーのうた	
	○授業最終日に実施 ＜弾き歌い＞ ・おかえりのうた ・さよならのうた ・うれしいひなまつり ・思い出のアルバム	音楽Ⅱ		
Ⅱ 前期	○夏季休業前に実施 ＜バイエル＞ ・任意の1曲→No. 60以降	さんぼ ・いぬのおまわりさん 手のひらを太陽に 世界中の子どもたちが 大きな古時計 ミッキーマウスマーチ おもちゃのチャチャチャ いちねんせいになったら はじめの一步 おばけなんてないさ アイスクリームのうた ・アイアイ とんでったバナナ・ふしぎなポケット 南の島のハメハメハ大王 アンパンマンのマーチ	バスごっこ ホ・ホ・ホ ＜小学校共通教材＞ かたつむり ・日のまる われは海の子 ・おぼろ月夜 冬げしき ・こいのぼり もみじ ふじ山 ひらいたひらいた かくれんぼ こもりうた 越天楽今様	
	○冬季休業前に実施 ＜バイエル＞ ・任意の1曲→No. 70以降 ○授業最終日に実施 ＜弾き歌い＞ ・選択曲から5曲			
器楽Ⅰ	前期試験曲	1	2	3
器楽Ⅰ	後期試験曲	1	2	3
器楽Ⅱ	前期試験曲	1	2	3
器楽Ⅱ	後期試験曲	1	2	3

	旧	新
レッスン形態	<ul style="list-style-type: none"> ・一人15分の個人レッスン ・非常勤講師と常勤教員で担当 	<ul style="list-style-type: none"> ・90分6人の<u>グルーブレッスン</u> ・非常勤講師と常勤教員で担当
教材	<ul style="list-style-type: none"> ・バイエル教則本 ・こどもの歌の伴奏の演奏 	<ul style="list-style-type: none"> ・バイエル教則本 ・こどもの歌の<u>弾き歌い</u>
楽譜	<ul style="list-style-type: none"> ・バイエル教則本 ・子どもの歌をテキストどおりに演奏する ・子どもの歌を能力に応じた伴奏の形で演奏する 	<ul style="list-style-type: none"> ・バイエル教則本 ・子どもの歌をテキストどおりに演奏する ・能力に応じた伴奏の形で演奏する ・<u>コードネームによる伴奏の形も可</u>
記録	<ul style="list-style-type: none"> ・個人のテキストに記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>レッスンノートの活用</u> ・メンバーのレッスン内容、自分のレッスンの宿題や感想を記入 ・担当教員に提出し、感想や指導を記入してもらう。
1時間の流れ	メンバーのレッスンの間は、各自ピアノ練習室で練習をする	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>同じレッスン室内で90分受講する</u> ・受講中の曲を一緒に歌う ・レッスンノートの記入（教員のアドバイスや楽典などの説明を書き留める。） ・<u>ノートの内容は評価の対象とする</u>

2. 学生の「弾き歌い」への取り組みの変化

後期には他の保育音楽関連授業の中においても、学生のピアノによる「弾き歌い」への意識に大きな変化が見られるようになった。

「あそびと音楽Ⅱ（保育科1年）」においては、コード演奏の指導の中で、グループや個人で弾き歌いの練習及び発表を行うが、それらの活動を当然のこととして、熱心に取り組む学生の姿が多く見られた。また、グループ活動の中では比較的演奏技術の高い学生が、演奏に難色を示している学生に指導をしたり、グループ内で励まし合ったりして、取り組みやコミュニケーションが良好になっていくという効果も得られた。

また、「保育・教職実践演習（保育科2年）」の授業で中武は、3週間という短い期間、6名という少人数ではあったが、「ピアノ（弾き歌いの技術向上を目指す）」講座を担当した。「器楽」の授業形態改編に大きな抵抗を示した保育科2年生の科目であったため、様々な事態を予測して準備を行った。しかし、入学後にピアノのレッスンを始めた2名の男子学生をはじめ、どの学生も歌いながら人前で演奏することに躊躇なく熱心に取り組んでいたため、その成長に非常に驚き、感動を覚えた。

授業の中では、「やきいもグーチーパー（作詞：阪田寛夫、作曲：山本直純）」「大きな栗の木の下で（作詞・作曲不詳）」「山の音楽家（作詞：水田詩仙、ドイツ民謡）」「雪のペンキ屋さん（作詞：則武昭彦、作曲：安藤孝）」「一年生になったら（作詞：まどみちお、作曲：山本直純）」「世界中

の子どもたちが（作詞：新沢としひこ、作曲：中川ひろたか）「大きな古時計（作詞：保富、作曲：ワーク）」「虹（作詞：新沢としひこ、作曲：中川ひろたか）」等の曲を一人が先生役で弾き歌いを行い、他の5名が子ども役で歌うという形をとった。

先生役の学生には、前奏の後で歌に入るときや曲の2番に入る時の声かけのしかた、伴奏の形態やメロディーが曲の中で果たしている意味を質問したり伝えたりしながら、子どもがその曲を豊かに表現するにはどうしたら良いか考えたりすることで、音や弾き方、歌声や声掛けのタイミングなどが短時間で飛躍的に上達していった。

また、子ども役の学生達は、伴奏の弾き方によって、歌いやすかったり歌いにくかったりすることを感じ、それはなぜか、という事を考え、自身が先生役になる時には、それを活かして「弾き歌い」をするようになった。

この3週間の授業を受講した学生の記録の中で、気付いた事柄として、「伴奏者の気持ち次第で曲の雰囲気や歌いやすさが変わる。」「他の人の伴奏を聞いていると、その弾いている本人にはわかりにくいことがわかると思いました。」という文章があった。

これらのことから、「器楽」ピアノのレッスンで「弾き歌い」を毎週行い、それを他の学生が聞いて学ぶことは、ピアノ演奏の技術そのものや応用力、表現力をも向上させる可能性があるということが推察できる。

3. ピアノレッスンノートの活用

今回の「器楽」及び「音楽」の授業形態改編に伴い、ピアノレッスンノート（資料4-①、②）を作成し、「器楽」及び「音楽」における授業の充実を図った。このノートの導入に伴い、見えてきたことがある。

第一に、学生の授業への取り組みの様子である。

しっかりと授業のポイントを捉えて書かれているものもあれば、毎回同じような内容しか書かれていないものもある。そこからは、書いた学生の授業への取り組みが見えてくる。

第二に、学生と担当教員との関係性である。

学生の記録に対して担当教員は必ず一人ひとりに励ましやアドバイス等のコメントを書く。この作業は非常に時間を要するもので、そこには担当教員の強い熱意と細やかな配慮がうかがわれる。その気持ちを学生が受け取ってやり取りをするうちに、初めは不安の大きかった学生が次第に自信をもってレッスンに臨む姿が数多く見てとれた。このように良い関係性を築いていくことが、ピアノの技術向上に良い影響を与えないはずはないと考える。とりわけ、言葉で思ったことを伝えることが苦手な学生にとっても、レッスンノートは指導教員とのコミュニケーションツールとして活用できる可能性を持つと考える。

平成24年度 ピアノレッスンノート 宮崎学園短期大学

授業日 曜日 時限

レッスン担当者 _____

____ 学年 ____ 科 ____ クラス ____ 番 氏名 _____

1. レッスンノートについて

○このノートは、あなたのピアノレッスンの足跡を記録し、よりよい指導を実施するために使用します。

○毎週レッスンの際に、その日のレッスンの曲名、グループ学習の内容や状況をなるべく具体的に記入し、担当の先生に提出してください。

○担当の先生が読んで、次回からの指導に活かされます。必要があればコメントが記入されて次のレッスン時に返されます。

○このノートの記入状況は、当学期の成績に含まれます。レッスンに真剣に取り組み、しっかりと記録を残してください。

2. 個人情報保護について

○このノートの記述には個人情報が含まれますので、管理は十分に注意してください。

○この内容について、個人名を出して外部に紹介することはありません。

○レッスンの状況を個人のブログ等に掲載したり、他人に話したりしてはいけません。

3. 取り組みについて

○レッスンの目標を明確にするため、具体的な個人の目標を設定してがんばりましょう。

○目標について、前・後期の最後に振り返りを行い、先生のコメントをいただきます。

<今期の目標>

<今期の振り返り>

○がんばったこと

.....

○今後がんばること

.....

.....

<指導者のコメント>



レッスンの記録

平成__年__月__日（ ）__限目 第__回

氏名< >

		自分のレッスンについて	メンバーのレッスンについて
レ ッ ス ン 曲	バイエル
	こどもの歌
	その他

<感想>

.....

<次回までの課題>

<指導者のコメント>

--

VI. 学生のアンケート記述から

今回の授業形態改編後、「器楽」及び「音楽」を受講している学生全員に対してアンケートを行った。詳細な分析は今後行って次年度に生かしていくが、現時点では次のような結果が導き出せると考える。

第一に、レッスン室の環境が良くない中でレッスンを受けている学生が少なからずいることである。ピアノの音の狂い、冷暖房の利き具合、部屋の狭さ等である。これらは、改善できる限りは関係部署に伝えていきたいと考える。

第二に、その環境の中でも自分の「弾き歌い」の可能性に気づいた学生がおり、実習でも役に立ったと感じていることである。また、今は技術の向上にまでは至っていないが、「弾き歌い」は必要と感じている学生が増えてきているということである。

第三に、ピアノを弾くだけでなく、みんなで「歌う」ことが楽しいという学生の多さである。アンケートの中には、「自分の弾くピアノにみんなが合わせて歌ってくれるのが嬉しい。」という記述もあった。この楽しさは、子どもとの楽しさにつながるものではないかと考えると、保育現場で学生たちが子どもたちと楽しく活動する様子が想像され、学生にも、子どもたちにも大きな可能性を感じる。

第四に、学生のピアノの平均的練習時間の短さである。ピアノを弾くことは技術であるから、練習しなければ上達はしない。一週間の練習時間が0～1時間では、いくら素晴らしい授業内容でも技術は定着しない。「昨年度はレッスン時間中に自分の番以外の時間で練習していたので、練習時間が無くなって困る。」という記述も多かったが、家に帰ってから練習時間がないのであれば、学校の休み時間を使ってでも練習しなければ、保育者としてのピアノの技術は定着しないと考える。しかし、必要があってアルバイトをする学生も年々増えてきていることから、いかに学校にいる間の時間を使って練習するかといった提案もしていく必要があると考える。

第五に、少数ではあるが、忙しいカリキュラムの中、1日平均1時間以上の練習をしている学生がいるということである。毎日の積み重ねの中、一週間に1時間練習する学生と1日に1時間練習する学生。この差はおのずと結果に表れるものと考えられる。

VI. 授業形態改編の結果及び考察

今回の授業形態改編により、保育科の2年生には昨年度と大きくピアノレッスンの形態が変わったことへの戸惑いや、他学生の前で弾くことへの抵抗感が多く見られる。しかし、保育科1年生や初等教育科の学生は、他者の受講内容を共有しながらスムーズに授業に参加することができていると思われる。また、そうはいつても、実習等の体験からピアノの「弾き歌い」の重要性は理解しており、いずれの学生も、多くの人の前でピアノを弾く状況にあることで、自身の練習により多くの時間を費やすことを意識するようになったと考える。

今後、練習時間が1週間に0～1時間程度の学生が、2～3時間に、2～3時間の学生が4～5時間、それ以上に移行していくことでピアノ演奏の技術も時間に正比例して向上することは予測できる。今回、授業形態の改編を行ったが、次は「練習したくなるようなレッスン」を目指して、システムの改良を進めていきたいと考える。

VIII. 保育音楽科目「あそびと音楽Ⅱ」との連携の試み

中武、片野、後藤の担当する保育音楽関連の授業「あそびと音楽Ⅰ・Ⅱ」においても、学生のピアノ技術向上のための授業方法を考案、実践している。その中で、活動の目的や子どもの動きに合わせたピアノ伴奏をつけるための基礎的な知識と技術習得のために、コードによる演奏法について学ぶ。その際に、ピアノレッスンで練習している子どもの曲を教材にすることで意欲を高めるようしたり、子どもの歌から音楽遊びに展開していく中で、実際に身体を動かして表現することで、ピアノの技能向上に欠かせないテンポ感、リズム感、拍子感、強弱感などを養ったり、音の高さや演奏法を変えることで、子ども達に活動のイメージを捉えやすくするといったことなどが挙げられる。

ここで、「器楽」及び「音楽」の授業形態改編前である、平成23年度年度後期の保育音楽関連の授業において後藤が行った、「弾き歌い」のための基礎となる「コードによる演奏法」について紹介し、検討を行う。

(1) 学生の状況及び授業の概要

本学に入学して数ヶ月で、学生は人前での手遊び歌の実施にはかなり慣れてくる。しかし、保育音楽の授業の中で歌ったり身体を使ったりする分野では楽しんで活動に参加する学生が、コードネーム等の音楽理論を学ぶことに対しては拒否反応が大きいという状況も見られる。また、教材についての知識や子どもの発達、実態に応じた指導技術など、保育者を目指すには越えなければならないハードルも多くある。

「弾き歌い」をする場合、楽譜通りに伴奏を弾きながら歌う方法と、コードを使って簡易伴奏をしながら歌うという2通りの方法が考えられる。前期より、「弾き歌い」できる技術を身につけるという目的を持って、「あそびと音楽Ⅰ・Ⅱ」の授業の中で、幼児の歌唱教材による弾き歌いの活動を取り入れてきたが、平成23年度後期から、よりピアノ技術の向上を意識した授業を試行的に展開してきた。今回、コードを使った簡易伴奏を学生が身につけ、即興的に使用できることを目指して、平成23年度後期に行った「あそびと音楽Ⅱ」の授業を基にこの取り組みについて検討する。

(2) 授業科目及び対象

	授業科目名	対象（平成23年度入学生）	履修人数
1	あそびと音楽Ⅰ（前期開講）	保育科1年Aクラス	44名
		音楽科1年（他学科履修）	
		保育科1年Bクラス	39名
2	あそびと音楽Ⅱ（後期開講）	保育科1年Aクラス	39名
		保育科1年Bクラス	40名
		音楽科2年（他学科履修）	

(3) 授業内容

- ①コード伴奏法の理解、実践、応用を目指し、グループでピアノ、シロフォンを使ったコード演奏を行いながら歌う。

② 毎時間指導を行った事項

- a. コード表記をおぼえる b. コードの和音をおぼえる
c. よく使うコード進行をおぼえる d. 歌に合わせた伴奏アレンジを学ぶ

- ・ a 及び b については、音符とアルファベットの記されたカード（資料5）を使用し、毎回の授業で習熟度の確認を行った。
- ・ d の、歌に合わせた伴奏については、メロディーとコードのみ記された楽譜を使用し、それを見ながら鍵盤楽器を演奏することで、コードの活用ができるようにした。

③ 使用した曲

かえるの合唱、きらきら星、ミッキーマウスマーチ、とんでったバナナ
さんぼ、もりのくまさん、メリーさんの羊、オブラディ・オブラダ、アイアイ、
どうさん、おもちゃのチャチャチャ、崖の上のポニョ

(4) 授業における工夫と成果

毎回の授業の中で、コード記号を見て、構成音が音名で答えられるように、カードや課題プリント（資料6）を使用していったところ、コードの理解は定着していった。学生の授業記録シートや、授業評価アンケートの記述の中にも、「コードが理解できた」、「難しいと思っていたコードが少しはわかるようになった」と記されていた。このことから、コード理論の習得についてはカードや音符などの視覚的教材を使うことで学生に意欲を持たせ、一定の成果を上げる可能性が見えた。しかし、40名前後のクラス授業においては、「弾き歌い」を「器楽」及び「音楽」の後期実技試験課題に取り入れるまでの、技術習得には至らなかった。

【資料5】カード



【資料6】課題プリント



このように、「器楽」及び「音楽」の授業において、一人15分ずつの個人レッスンを行っていた昨年度は、多人数の授業において「弾き歌い」の基礎的な事項を学習しようと試みても実績を上げにくい状況があったと考えられる。

VII. おわりに

学生のピアノ技術の向上を目指して、ピアノレッスンの改編、及び保育音楽の授業との連携の可能性を検証してきたが、これらの方法により目的を達成していくには、学生にも指導する教員にもより良い形で目的やシステムが浸透するよう、さらなる改善が必要であると考えます。

通常、バイエル教則本などの様々な教則本の功罪について論じられているが、我々は学生のピアノ技能向上は教材の功罪によらないと考える。教育方法、指導者の対し方によって教材は功にも罪にもなるものであることを肝に銘じたい。

また、保育所保育指針の中で、音楽は「保育の内容」の「表現」のための一つ的手段として位置づけられている。学生たちが保育現場に出れば音楽は、日々出会う子ども達の発達過程の中で「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造力を豊かにする（保育所保育指針 p. 18）」ための大切な手段である。よって、保育の現場で子ども達の身近にあるピアノを表現豊かに演奏し、美しい声で歌が歌えるという事は、保育者にとって子ども達の発達を促すための重要な道具の一つであり、この事は、保育者を養成する教員として常に念頭に置くことが肝要であると考えます。

ここで、前述の少人数の授業における中武の設問に対する保育科2年男子学生のコメントを挙げたい。まず、「子どもにとって『歌う』とはどういうことですか？」という設問に対しては、「子どもにとって『歌う』とは、遊びの一部であったり、友達や先生と一緒に活動する手段だったりします。子どもの年齢によっても様々で、例えば3歳児未満なら、歌に合わせて先生がペープサートなどを出しながら子どもたちと関わることによって雰囲気を出すことができます。5歳くらいなら、発表会に向けての練習などで、達成感を味わうことができます。子どもにとって、歌うことは必要だと思います。」さらに、「その歌をより豊かに実現するための伴奏とはどのようにすれば良いと、思いますか？」という設問に対しては、「遊びとして『歌う』時の伴奏は、子どもたちの様子を見て色々と変化させていけると思います。例えば、全体的に元気がないようならば弾むように弾くのも良いし、逆に落ち着きがないときは、おとなしめに弾くと良いと思います。ただ楽譜通りに弾くのではなく、その時の雰囲気に合わせて弾けるようになれば良いと思います。」という記述があった。

この記述からは学生が実感を持って書いていることが伝わり、この短期間の中でそのことに自ら気付く学生がいることに感動するとともに、この男子学生の育ちが実習現場や本学の教育の中で培われたものであるとすれば、大きな喜びを禁じえない。これこそ私たちが目指している「弾き歌い」の姿ではないかと強く感じた。保育における音楽の役割は、「遊ぶ」子どもたちの気持ちや動きを豊かに促し、支えるものである。そのことを、保育現場における実習やボランティアで経験を積んできた学生から改めて教えられた瞬間であった。

音や音楽と「遊び」との関連について、次のような一文がある。

「音・音楽を使う活動は、『楽しい』という事がベースになります。人の発達は、この楽しさの広がりや深まりの中に観察することができます。発達を楽しい遊びの中に見ることができるのです。（中島、山下 p. 62）」

重ねて著すことになるが、ピアノで弾き歌いが自在にできる保育者は、子どもを楽しい遊びの世界に誘う事ができる。また、その「遊び」の場に子どもと共に居ることで、保育者としての成

長も得られるのではないかと考える。

今回、非常勤講師の先生方をはじめ関係の先生方のご賛同を得て始められた新しい試みに、今後さらなる成果と学生の成長を期待していきたい。

参考文献

- 「音と人をつなぐコ・ミュージックセラピー」2002年 中島恵子 山下恵子 春秋社
平成24年3月 宮崎学園教育研究 第8号 p28
- 中武亮子 保育の音楽におけるピアノ技術―「弾き歌い」を行うことについて―の一考察
平成24年3月 宮崎学園教育研究 第8号 p88
- 片野郁子 保育科「あそびと音楽Ⅰ・Ⅱ」における「コードによる弾き歌い」の指導について
平成24年3月 宮崎学園教育研究 第8号 p49
- 後藤祐子 コード伴奏法の指導法研究～あそびと音楽での実践を通して～
「保育所保育指針」平成20年 厚生労働省告示第141号 株式会社フレーベル館